

白藍塾オリジナル

2011入試小論文分析&解答のヒント

2011年3月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・樋口裕一・大原理志・大場秀浩

●慶応・環境情報学部

かなり難易度の高い問題だ。ほとんどの受験生にとって、どう考えてよいのかわからない問題だろう。なんとか手がかりを見つけて、それらしい答案を書くしかない。

資料の内容は、最初の設問文の中でほぼ説明されているし、直接読む必要はほとんどない。参考になりそうなのは、資料5～7だけだが、それも実際の答案を考えるのにはほとんど役に立たないだろう。

問1～4はすべて連動しているので、関連づけて考える必要がある。まずは問1の「解決したい問題」から考えるのがやりやすいだろう。具体的な手がかりがない限り、問2以下の問題は考えようがないからだ。

問1の答えは、環境問題、少子高齢化、格差社会、ネット社会の弊害等、自分がよく知っていて、自分にとって考えやすいものでかまわない。

問2は、問1で答えた問題について、「どんなデータをどんな方法で測定するのか」を考える設問。問3・4と合わせて考えると、そのデータを用いた「新しい単位」(問3の答え)が、「問題の特定の性質」(問4の答え)を理解する上で役に立つように考えなくてはならない。ということは、問2～4の答えは、ばらばらにではなくて一緒に考えなくてはならないわけだ。

格差社会を例にとろう。実際の経済的格差と人々が感じる「格差感」との違いがしばしば問題になる。そこで、ある人の所得水準とその人が感じる「格差感」との相関関係をデータにとる。実際の格差と「格差感」が一致していれば1として、その差が広がるほど数値が大きくなるような単位を考える。その単位で表わされる数値を分析

することで、「格差感」の正体、つまり格差問題の心理的な要因が明らかになり、格差問題を解決するための重要な手がかりになるだろう。このように考えた上で、問2～4の答えに当たる内容をそれぞれ振り分ければよい。

書き方としては、すべて基本型Aを応用すべうまくまとまる。問4は600字とやや字数が多いが、数値の増減が意味するものをケースごとに具体的に説明すれば、そのくらいの字数はすぐに埋まるだろう。

当然のことだが、新しい単位を考えることなど、本物の科学者でも簡単にできることではない。したがって、科学的な整合性にこだわりすぎず、柔軟な発想力と問題の本質を見抜く力をアピールするつもりで考えるべきだろう。問2に「将来に開発を期待する未来の科学技術を用いてもよい」ともあるので、非現実的でない程度にそれらしい説明ができれば十分だ。

©執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179)

<http://www.hakuranjuku.co.jp>